

タイムトラベル

とみ さわ さぐ 富沢を探る

—富沢遺跡第30次調査のあらまし—



▲2万年前と今



▲旧石器時代の調査風景

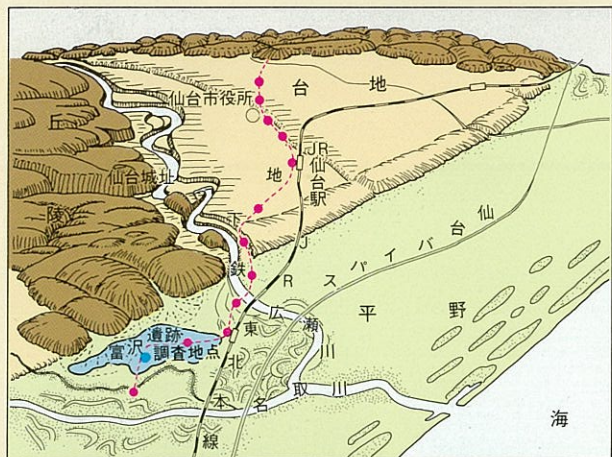
■発行：〒980-91 仙台市国分町三丁目7-1 ☎261-1111)
仙台市教育委員会文化財課
■発行日：平成元年3月15日
■印刷：東北プリント

仙台市教育委員会

富沢遺跡とは…



▲遺跡の広がり調査地点



▲地形のようす(起伏は一部、実際より誇張して表現してある。設案 寛原図)



▲弥生時代の水田あと(15次)



▲古墳時代の水田あと(15次)



▲弥生～古墳時代の鋤(すき) (8次)



▲縄文時代の中でも古い石器 (28次)

とみざわ いせき
富沢遺跡は、仙台市南部の富沢地区を中心とした、面積が82haにもおよぶ広大な遺跡です。

このあたりは、現在は区画整理によって平らになり急速に市街化が進んでいますが、それ以前はまわりの高い土地に囲まれた低いじめじめしたところだったようで、最近まで水田として利用されてきました。

ところが地下鉄の調査でその下に古い水田あとが埋もれていることがわかりました。その後も各所で調査が行われてきましたが、これまで弥生時代から江戸時代までの水田あとが何層にも重なって発見されたり、下層から縄文時代の層も見つかると、富沢の歴史がかなり古くさかのぼることがわかってきました。

第30次調査の記録

今回の調査は小学校建設によるもので、面積は約5,000㎡です。上の方からは、保存の良い水田あとが重なって発見されました。下の方からは、富沢遺跡では初めて旧石器時代の生活あとも、生々しい樹木とともに発見され、富沢の歴史がさらに2万年前までさかのぼることが明らかとなりました。

▼体験学習…ただ今足あと掘りに夢中です(9月)



▼砂の下から顔を出す水田のあぜ(10月)



▼盛土を除いて調査が始まる(昭和62年4月)



▲次々と水田あとが発見される中での見学会(6月)



▲旧石器発見第一号(3月)

7世紀の水田跡 ほぼ原形のまま出土

仙台・富沢遺跡
利用 水量調節装置も確認

10月30日河北新報

富沢遺跡の7世紀の水田跡が、ほぼ原形のまま出土された。この水田跡は、水田のあぜ(あぜ)と、あぜの間に設けられた水量調節装置(せき)が確認された。この水量調節装置は、水田の水を調節するための装置で、この装置の出土は、7世紀の水田の構造が明らかになった。また、この水田跡は、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で、この水田跡の出土は、この時代の水田の構造が明らかになった。



▲いよいよ旧石器の調査始まる(昭和62年3月)



▲調査が進むにつれ、資料が続々と(3月)
▼市長も調査現場を視察(5月)



▼保存が決まり調査もしだいに終盤に(10月)



▲2万年前の森は一時地中に(12月)

旧石器人の生活跡発見



▲(4月28日朝日新聞)

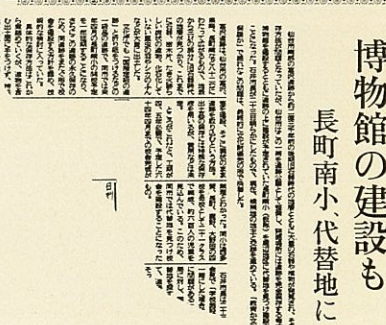
たき火や石器群

約2万年前の野営地

▼小雨の中行われた説明会…1,200人も一般市民が参加(6月)



仙台 富沢遺跡は完全保存



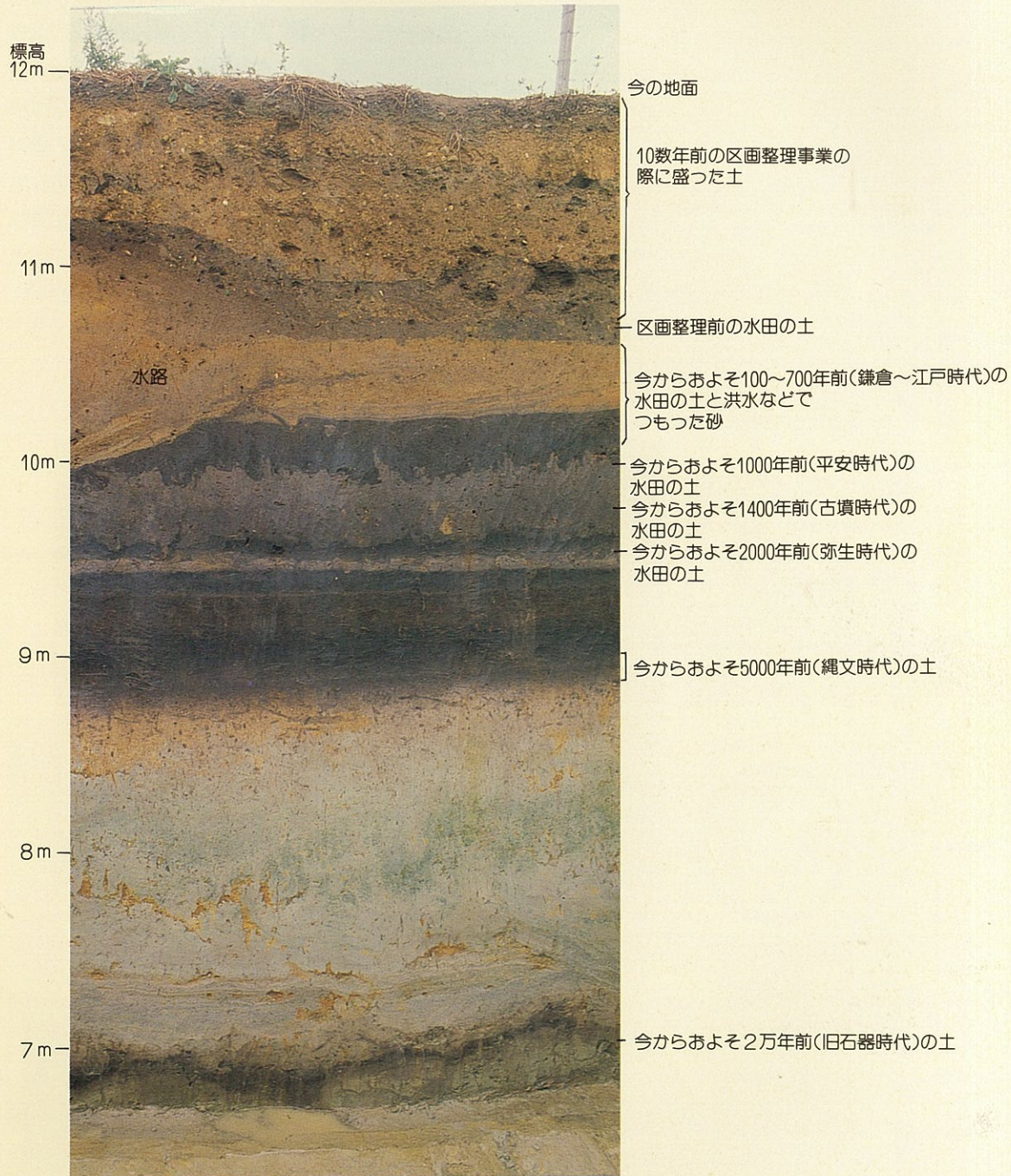
▲(8月24日読売新聞)

博物館の建設も

長町南小代替地に

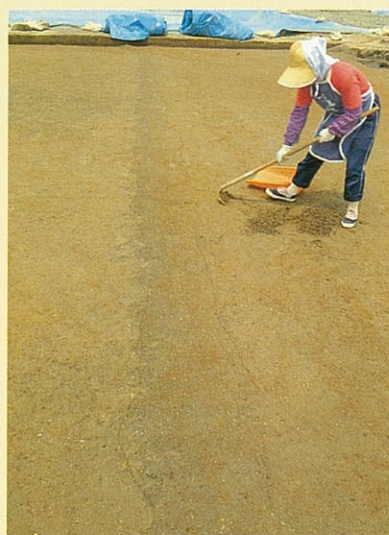
今回の旧石器時代の調査の成果は、県内外に大きな話題を呼びました。世界に例のない貴重な発見に、8月、仙台市は遺跡を保存し、将来、博物館を含めた遺跡公園として整備・活用していくことを決めました。

土の重なり方(地層)



現代につながる水田

今からおよそ100~700年前 (鎌倉~江戸時代)

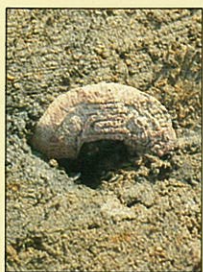


▲水田のあせをさがす作業

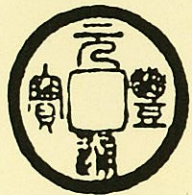
鎌倉時代から江戸時代にかけての水田あとが上下4層にわたり、広い範囲から見つかりました。どの水田あとも幅3mの大きい水路を利用してあり、そこから水田に水を取り入れていたようです。水田の大きさはおよそ10m×20m(200㎡)ぐらいで、多くは長方形の形をしています。

水田の土の中や水路の底からは、当時使われた陶器などのかけらや、古銭・木製品などが出土しています。

▼水路を中心とした水田あと



▲中国からはるばるやってきたお金



▲表などを編む時の木のおもり



▲表づくり具(紙漉重宝記より)



▲水路の分かれ目に打ち込まれた杭列

水路の断面を見ると、洪水などの砂で埋まりながらも、そのつど作り直しが行われていたようで、基本的な位置は最近までの水路に引き継がれてきたようです。江戸時代の絵図には、平岡村と富沢村の村境を示す水路が描かれていますが、今回発見された水路が位置や方向からこの村境の水路にあたるようです。

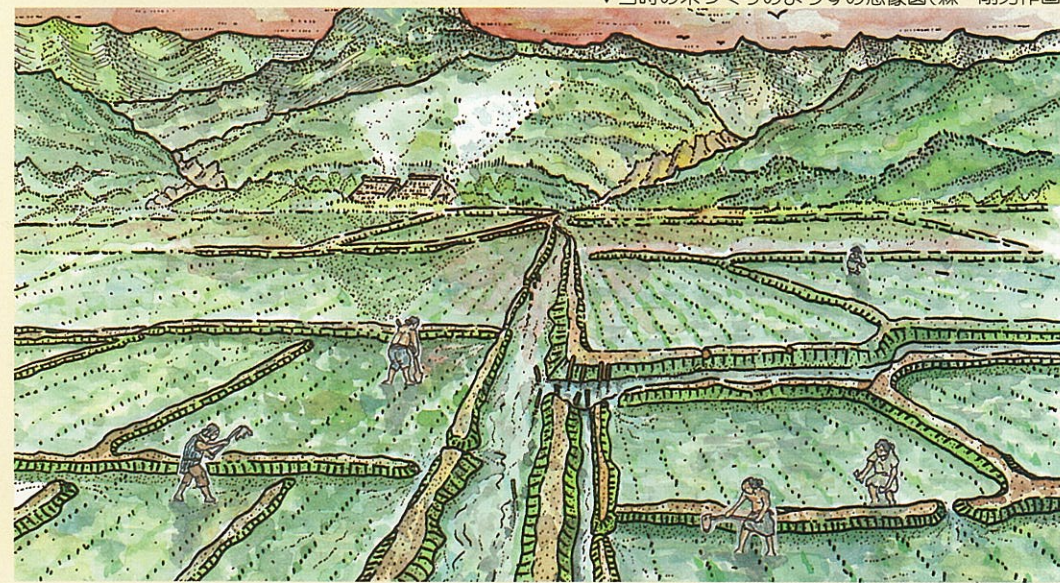


▲水路の断面



▶江戸時代の終りに書かれた絵図(仙台市博物館蔵)○印内が調査地点付近

▼当時の米づくりのようすの想像図(森 剛男作画)



計画的に作られた水田

今からおよそ1000年前
(平安時代の中ごろ)

へいあん
平安時代の水田は、大あぜと小あぜで区切られており、大きさはおよそ10m×20m(200㎡)で、形は長方形をしています。大あぜは真北が、真北に直角にまじわる方向にまっすぐ作られており、広い範囲で計画的に水田作りが行われていたようです。



▲水田あとの調査風景



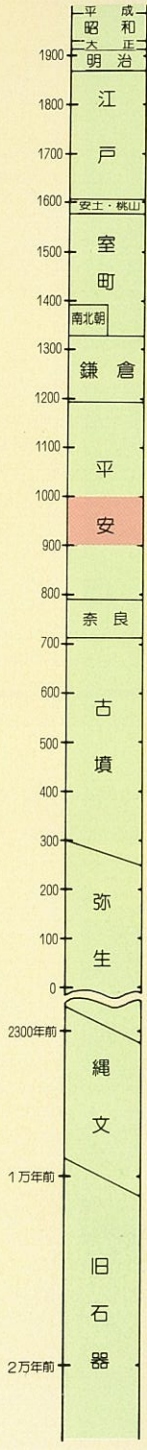
▲水田あとの全景—左右に走るのが大あぜ



▲出土した土器—なぜか底に穴がある



▲出土した砥石



▶水田に残った足あと—白い火山灰がつまっている

砂に埋もれた水田

今からおよそ1400年前
(古墳時代の終わりごろ)

こぶん
古墳時代の水田はその多くが砂でおおわれていました。おそらく予期しない洪水で、水路だけでなく両側の水田まで砂で埋まったのでしょう。当時としては大災害だったでしょうが、この砂のおかげで水田がほぼそのままの状態に残ったのです。



▲砂を取り除くと黒いあぜが…



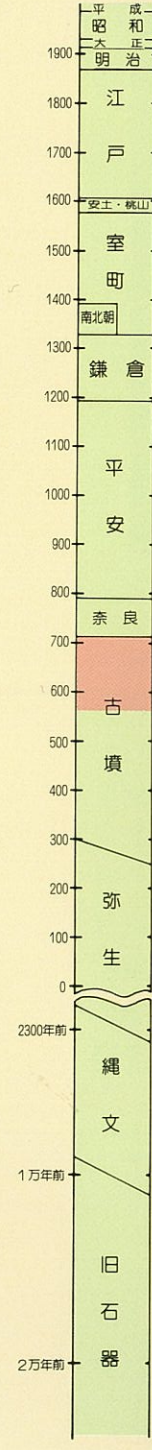
▲水路からあふれた砂が水田を広くおおっている



▲1枚の水田



▲砂を取り除いた水田



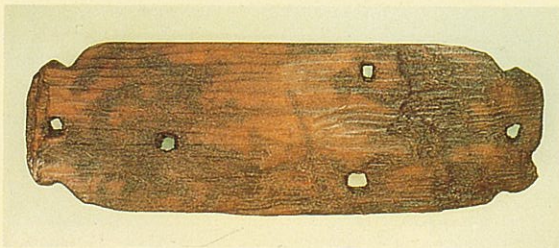


▲水田あとの全景

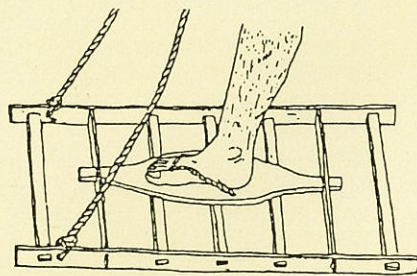


▲水の調節用とみられる木材

この水田は幅3mの大きい水路を中心に広がっており、特に北側からは一辺3~5m四方の小さな水田が数多く発見されました。水田は東西方向のあぜを軸として区切られており、あぜや水の通る道（水口）の作り方などには地形に合わせた工夫がうかがわれます。大きい水路と小さい水路の分かれ目にある杭でさし込まれた木材は、水を調節するためのものでしょう。



▲出土した大足



▲大足の使い方(代踏み用の道具)

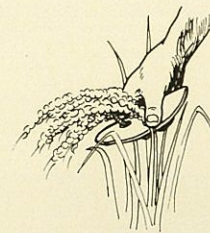
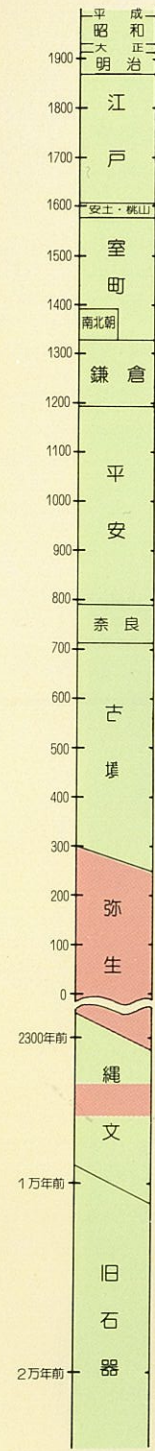
水田の土の中から石の農具

今からおよそ2000年前
(弥生時代)

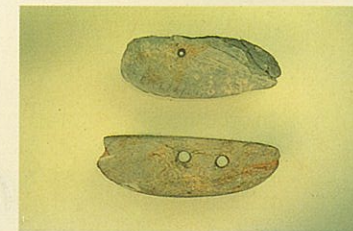
弥生時代の水田は残りが悪く、あぜの一部やあぜのあとが見つかったぐらいでした。それらの土の中からは、当時使われた土器や石庖丁・石ぐわ・やじりなどが出土しています。石庖丁は稲の穂を摘みとる道具として使われたものと考えられています。



水田のあぜのあとを調査中



▲石庖丁の使い方



▲出土した石庖丁



▲出土した土器

大きく掘られた穴

弥生時代の下には厚い泥炭層（植物の根や茎がよく残っている土）があり、そのころ湿地であったことを示しています。ところがその下から5000年前ごろの縄文時代のあとや石器・木の倒れたあとが見つかりましたので、少なくとも、そのころは生活ができる環境にあったことがわかります。

今からおよそ5000年前
(縄文時代)



▲弥生~縄文時代にかけたの地層



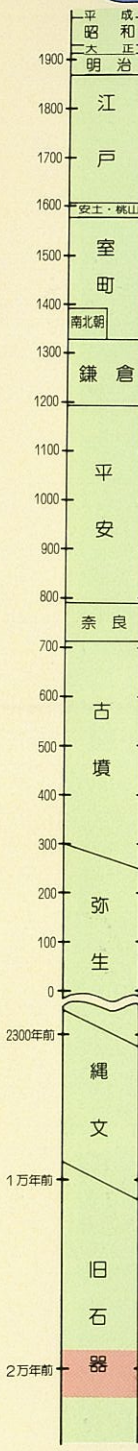
▲大きく掘られた穴



▲木が倒れた時にできたあと

氷河時代の生々しい生活環境

今からおよそ2万年前
(旧石器時代)



▲調査風景—○で囲んだところが下の写真

縄文時代の層のおよそ1.5 m下から樹木をふくむ黒い層が見つかり、年代や花粉を調べたところ、およそ2万年前の氷河時代の層であることがわかりました。そこで広く調査をしたところ、今度は多数の樹木とともに当時の人々の生活のあとも見つかりました。いわば森と人々の生活を中心とした2万年前の世界が砂や粘土にパックされた状態でそのまま保存されていたのです。

生活のあと

生活あととしては、やや高いところから火をたいたあとを示すような炭が見つかり、そのまわりから割ったばかりの石器やかかけがたくさん出てきました。たぶん火をかこみ、石器作りをしていたのでしよう。



▲石器の出土地点(竹ぐし)と炭が集中するところ(白いヒモ)



▲炭が出ている状況



▲出土した石器

また、別の2ヶ所からは、きちんとした石器が数点出てきました。石器が使われたところなのででしょうか。

氷河時代を力強く生きていた人々の息吹きが感じられます。



▲出土した石器

まわりの環境を示すもの

植物



生活あとのまわりのやや低いところからは、およそ200本の樹木が生々しい姿で出てきました。これらの多くは根元から幹が折れた状態のもので、そこに生えていたことを示しています。また、樹木の近くからは小枝や榎果(松ぼっくり)・葉・種などがたくさん見つかりました。

▼アカエゾマツの榎果(松ぼっくり)

▲樹木と根のようす



▼ケヤマハンノキの葉

▼チョウセンゴヨウの種



▲根と幹(まっすぐ倒れているのが幹)



▲樹木の出土しているようす

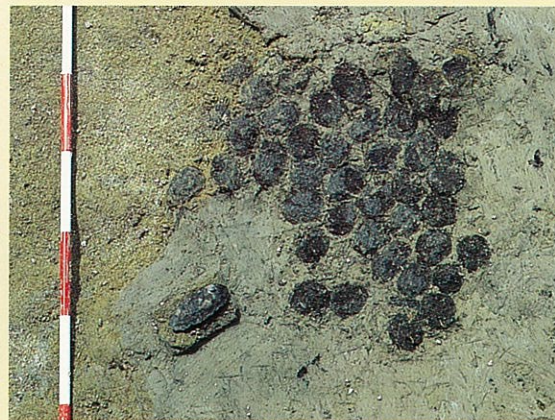
や、ヨシ・スゲなどの生える湿地・スギナモなどが生える沼などが点在する風景を描くことができます。なお、現在でも食べているチョウセンゴヨウの種は当時の食べもののひとつだったことでしょう。

これまでわかった植物の種類ですが、球果のほとんどがアカエゾマツやグイマツであることから、200本の樹木の多くはそれらの針葉樹であろうと思われます。また、種子ではチョウセンゴヨウ・ハンノキ・スゲ・スギナモなど、葉ではヤナギ・ケヤマハンノキ・ヨシなどが確かめられています。

これらの種類と花粉のデータをあわせて当時の森のようすを復元すると、アカエゾマツなどの針葉樹に広葉樹が少しまじるような木立ちのなかに、草原

動物

動物がいたことを示すのがフンです。20ヶ所以上から、多いところで50~150コがまとまとって出ています。フンの中には消化管内で分泌された粘液が残っていました。形やサイズ、中にふくまれているものから、



▲フンの出土しているようす

シカでもかなり大型のシカの落としたものと思われます。あるいは今は絶滅したオオツノジカが、北方に生息しているヘラジカかもしれません。おそらく、彼らは水草や湿地に生える植物を食べに、水辺にやってきていたのでしょう。



▲現在の金華山のシカのフン

昆虫

50点ほどの昆虫の羽などが出土しています。確かめられている種類にはヒラタネフイハムシ・ゴミムシ・コガネムシなどの仲間などがあります。当時のこまかな環境を伝える大切な資料です。

▲昆虫の出土しているようす



▲昆虫(上の層から見つかったもの)

当時の環境を復元すると

旧石器時代でも2万年前ごろは、氷河期の最後の寒い時期でした。発見された植物からみますと、当時の仙台は現在よりも6~7℃低い、北海道の北半あたりの気候だったようです。

今回の調査成果をもとに、当時の富沢の風景を描いてみました。針葉樹などがおい茂る林の一隅で、2万年前の富沢人は火をたき、石器作りをしていました。その遠方には沼湿地が広がり、大型のシカが草を食べています。おそらく彼らは水辺にやってきた動物たちをねらい、これから狩りをする準備をしていたのではないのでしょうか。

▼2万年前の富沢の復元想像図(森 剛男作図)

